

広島文学館の可能性

一 はじめに

「広島文学館の可能性」と題した理由は二つある。

その一つは広島に文学館ができる可能性がはたしてあるのだろうかということについてこれまでの歴史的経過をふりかえりつつ考えてみようと思ったからであり、もう一つは広島に文学館ができるとしたらどのような可能性があるかということについて考えてみたいと思ったからである。

まず、広島になぜこれまで文学館が作られなかったのかということについて考察し、ついで、広島に文学館を作るとしたらどのような文学館を作るべきかということについて私案を述べ、広島文学館の可能性について考察してみたい。

二 なぜ広島に文学館が作られなかったか

水 島 裕 雅

広島に文学館がないのはなぜであろうか。これは広島を訪れる人々の心に浮かぶ素朴な疑問であろう。広島は中国・四国地方の政治・経済・文化の中心地であることは誰でも認めることである。また、歴史的にみても江戸時代の漢詩文化の発信地であったことは、頼山陽史跡資料館を訪れたことのある人は納得することであろう。

近代文学の歴史を振り返ってみても、近代演劇の創始者としての小山内薫や、「赤い鳥」を創刊して児童文学史上に不滅の名前を残した鈴木三重吉とともに広島市の出身である。そうした広島が生んだ優れた文学や文学者をなぜ広島の人々は郷里の誇りとして高く評価しようとしないのであろうか。

そればかりでなく、人類最初の被爆地としての広島はその地獄絵巻のなから数多くの優れた原爆文学を生み出した。こうした原爆

がもたらした痛みを後世に伝える資料が多く残されている広島に、いまだに文学館のひとつもないのはなぜであろうか。

広島平和記念資料館を訪れる人は、はじめはその被害のひどさと恐ろしさを実物と映像によって知らされ圧倒されるが、心ある人々はつぎにその悲劇のなかで人々が何を考え、何を伝えようとしたかを知ろうと思うであろう。その時に手がかりとなるのはやはり人々が命がけて残した言葉であり、文学である。そうした言葉を集め、整理し、公開する文学館がなぜ広島のような大都市に作られないのか。これは大きな謎としか言いようがない。

三 これまでの歩み

広島に文学館を！という運動はこれまでなかったわけではない。私を知っているかぎりでは、すでに一五年前の一九八七年にひとつの大きな運動があった。それは、はじめ「広島の文学資料保全をすすめる会」と呼ばれていて、当時の新聞を見てみると、この年の二月一三日にこの会が署名運動を始めたことがわかる。

この会は中原豊・広島大学学長(当時)を代表とし、発起人に一人の大学関係者ならびに文学・芸術関係者を並べ、さらに各界の著名人六四人の賛同呼びかけ人に支えられた組織であった。

こうした呼びかけはマスコミにも大きく取り上げられ、中央の作

家や著名人も署名やカンパに協力し、六〇〇〇人の署名を背景に「広島の文学資料保全をすすめる会」は七月一四日に荒木広島市長に「ヒロシマの文学作品にかかわる資料等の調査、収集・保存、及びその施設建設に関する要請」という要請文を手渡した。しかしながら、当時の広島市の責任者の認識は好村氏(のちにこの会の代表幹事)によると「広島市の文学と言ったっていったい何があるんか」程度のものであったという。

それから平岡市長、秋葉市長と歴代の市長にこの会(のちに「広島文学資料保全の会」と略称されるようになった)は文学館建設の要請を続けたが、広島大学の跡地利用計画とからめられたり、あるいは財政的理由で実現しなかったのである。

それでは一九八七年の要請文を読んでみよう。そこにはまず「二年前の八月六日、広島は無惨にも焼かれ、壊され、傷つき、人類はまったく体験したことのない恐怖の核時代を背負って生きる幕あけとなりました。ヒロシマは原爆地獄の悲痛な体験を通じ、核廃絶と人間の尊厳をかかげる原点としての意志表示をしつづけてきました。とあり、人類最初の被爆地としての広島が前面に出されている。

ついで「このなかで、原爆文学といわれる文学作品は「プレス・コード」により、原爆に関する文学作品の発表は強い制限のもとにおかれ」(広島新史)ながらも、粘り強く書き続けられ「広島思想の体系化」に大きな影響を及ぼしていきました。さらに、「反核・平和

を求める世界的な世論と呼応して、地域や学園、家庭や職場において、ヒロシマの体験が人類共通の「体験」としてくりかえし読み継がれ、多くの人びとの心の中にヒロシマの意味をなげかけています」と、〈原爆文学〉の重要性を〈反核・平和〉の運動と結びつけて論じ、そのあとに、〈現在、有名・無名を問わず、広島の文学作品、作家の資料、遺品は遺族や友人たちの手にまかされ、保存状態は十分とはいえない状況にあります〉とあり、資料の保存の不完全さを指摘し、〈このままでは散逸のおそれができています〉と述べている。当時は戦後四二年たった時期であったが、すでに資料の劣化や散逸の恐れが指摘されていたのである。

そしてこの要請文はつぎのように締めくくられている。〈私たちは、こうした状況をかんがみ、ヒロシマの文学作品など（手記・日記・遺品等をふくめた）にかかわる資料の調査及び収集・保存を行政の責任によつて早急に着手すべきだと考えます。また、これらを後世に残し継承、広く国民に公開していくことは私たちに課せられた責任でもあると考えています。これまでのヒロシマを再認識させ、平和意識を高めるためのご努力に敬意を表するとともに、市民的財産として、ヒロシマの文学作品にかかわる資料等の調査、収集・保存、及びその公開のための施設の建設を心から要請するものです。〉

残念ながら、先に述べたように、広島市はこの要請文にこたえて資料の収集・保存を市の責任において行おうとはせず、文学館の建設

は実現しなかった。

そこで、この会の人々はこの機会に主として散逸の恐れが多い原爆文学や被爆記録の収集を始め、多くの賛同者の協力により、一万数千点の資料を集め、それを文学館ができるまでの保管場所として広島市立中央図書館を選び、寄贈したのである。私はこの会の努力を高く評価したいと思う。この会の努力がなければ、戦後半世紀以上たった現在では広島文学資料の多くは散逸するか破棄されてしまったであろう。

それでは寄贈された資料はどうなっているであろうか。昨年の広島市議会でも問題になったことであるが、中央図書館の三階の奥にたしかに広島文学資料室は設置され、一部の作品は公開されたが、ほとんどの資料は隣室のロッカーか段ボールのなかに入れられているだけで、関係者でなければどこに何があるかも分からず、見ることも容易でない。また、常温、常湿の部屋ではない普通の部屋に置かれているので劣化が進んでいる。戦後の粗悪な紙や酸性紙に鉛筆で書かれたものが多く、紙は変質して触ると崩れそうなものもあり、また黄ばんだ紙の上の字は薄れて判読が難しくなりつつある。かうじて貴重な資料の一部は収集されたが、保存状態が悪く、また研究・公開の段階にはほど遠いのである。

問題はどこにあるかというと、やはり根本的には広島市が行政の責任によつて、広島文学を大切にしようとする意識がないこと

であろう。市民が集めたものを中央図書館に置かせてやったからもういいのではないかと考える方がこれまでの広島市の対応に見られたが、図書館の本来の業務は本の購入や閲覧・貸し出しであって、こうした一次資料の調査、収集・保存、研究・公開という仕事は本務ではない。専門の学芸員もいなければ、研究も公開もできないのは当然であろう。会の努力もそれに応えた市民の善意も実ることなく、現在では残念ながら資料は人知れず中央図書館の一室に積まれたままになっている。

四 旧日本銀行広島支店を文学館にという運動について

一昨年秋のことであるが、広島市はその広報誌である「市民と市政」に旧日本銀行広島支店の有効活用案を市民に求めた。「広島文学資料保全の会」の人々はここに光を見いだすとともにあせりも感じた。それはこの会の人々がかねてこの旧日銀広島支店を広島市が買取り文学館とすることを提唱していたからである。

たとえば、この会の代表幹事の好村教授は一九八七年三月二十七日の「中国新聞」紙上に「広島に文学資料館を」という文章を寄せ、つぎのように述べている。私たちは東京の日本近代文学館のようなものを建ててほしい、とまで贅沢を言うつもりはない。たとえば、いま保存への要望が出ている日本銀行広島支店（広島市）の建物な

どを市が買い上げて、内部を少し手を入れれば、立派な文学館として生きるのではないかと、素人考えかもしれないが、私は考えている。そうならば、すぐ裏の頼山陽の旧居跡も、この文学館の付属の施設として、ともに生かすことができるだろう。そういう文学館が造られれば、平和都市広島にふさわしい文化の中心が、またひとつつけ加わることになる。旧日本銀行広島支店を文学館にしてほしいという希望はすでに一五年前から提出されていたのである。

この建物は被爆建物であり、また原爆にもびくともしなかつた堅固な建物である。その建物が広島に残された数少ない被爆建物として、また昭和の初期を代表する建物として広島市の特別史跡に指定されたので、日本銀行がこの建物を広島市に無償で貸与することになり、広島市は市民に有効活用案を求めた。「市民と市政」に二回にわたって掲載されたその文章を読んだ「広島文学資料保全の会」の人々が焦燥を感じたのは無理のないことであろう。つまり、広島市が文学館建設の要請を断り続けてきた大きな理由は財政難であったが、この旧日銀広島支店の市への無償貸与による有効活用案として文学館が採用されなければ半永久的に広島文学館建設は不可能になる。しかしながら、原爆文学ひとつを取ってみても、被爆後五七年たち、被爆者はさらに高齢化し、すでに多くの方が物故している。それにつれて被爆記録は散逸しつつある。また、すでに会の努力で収集された一万数千点の資料も中央図書館の一室に積まれて空

しく劣化しつつある。この旧日銀広島支店の有効活用案の募集という機会を逃しては、貴重な文学資料は存在価値すら考慮されずに無と化してしまふ恐れがある。この会の人々は今までの努力を無にしないため、また文学館運動の発展を願い、「広島に文学館を！市民の会」の準備会を結成した。

そこに広島市が昨年一月に旧日銀広島支店を市民に公開したので、この建物の見学会を準備会は呼びかけ、その時集まった二〇余人が隣の頼山陽史跡資料館で話し合いの場を持ち「広島に文学館を！市民の会」を結成し、私がこの会の代表に選ばれたのである。

市民の会のまずなすなければならないことは広島市が呼びかけた旧日銀広島支店の有効活用アイデア募集に応募することである。ここで会員の意見を聞き、会員にも独自に市にアイデアを出すことを求めながら、市民の会としても秋葉市長と広島市役所企画調整課にあてて要請文を出すことにした。

その後市民の会は月に一回「朗読会／広島市の文学を語る」という朗読会兼研究会を開き、まず峠三吉、原民喜、栗原貞子、正田篠枝、大田洋子を取り上げることにした。毎回会場は満席となり、会員も一五〇人を越えた。そこで、八月六日前後に二週間ほど朗読会で取り上げた五作家に絞った「原爆文学展」をしたらどうかという案が会員の支持を得て、実行委員会方式で行うことになり、実行委員として一〇余人が名乗り出てくれた。予定の七月までには数ヶ月しか

かつたのであるが、実行委員会の方々は精力的に活動してくれた。その結果、広島市の企画を優先するという企画調整課の方針のため多少変則的な日程になったが、昨年の七月二日から二六日、八月二日から七日の、計一二日間「原爆文学展」五人のヒロシマ」が開催され、連日最高気温が三五度を越すという酷暑にもかかわらず三三〇〇人以上の人々が来館され、冷房施設もない建物のなかで熱心に見て感想文を書いてくださったのである。市民の会の人々はこの成果を見て広島に文学館が欲しいという市民の要求は強くあると感じた。

五 広島市の文学館の意義

つぎに、昨年七月の広島芸術学会の大会におけるシンポジウムを振り返り、広島に文学館を作る意義について考察してみたい。

昨年の夏の広島芸術学会の大会において、私はひとつのシンポジウムを企画した。それは、「広島と／の文学」という題をつけたもので、パネリストに岩崎文人広島大学教授と三浦精子「ぎんのすず研究会」代表をお招きし、私が司会を務めた。

この一見奇妙な題は、従来の「広島市の文学」だけではこぼれ落ちるものを拾い上げ、従来の広島での文学の位置づけやその問題点を取り上げ、いかにしたら広島市の文学を正當に評価できるか、またその調査、保存、研究、公開はどのようになされるべきであるかとい

うことを考えるきっかけにしたいと思つてつけたものである。

基調講演は「広島県の文学」という著書をすでに発表されている岩崎氏にお願いし、まず広島にどのような文学があるかについてお話をいただいた。岩崎氏は被爆作家たちが残した文学の価値やその継承の必要性について語ってくださった。そして広島県の文学を安芸圏と備後圏に分類し、備後圏の文学館は井伏鱒二を中心とした福山文学館があるのに対して、広島市に安芸圏の作家を顕賞する文学館がなく、その建設の意義と必要性を論じられた。

三浦氏は第二次大戦後間もなく広島で出版された月刊児童雑誌『ぎんのすず』の研究の意義と可能性について、豊富なスライド、実物展示によって具体的に明らかにされた。原爆によって無残に破壊された焼け跡のなかで子供たちが集まり夢中になって本を読んでいる姿に感動し、日本の未来を子供たちに与え、託していくために出版された『ぎんのすず』は、学校の教材や副読本として全国に受け入れられ、そこに多数の有名、無名の作家が寄稿していたのだが、出版の中心が復興した東京に移るにつれて、その事業は衰えていった。しかし戦後のしばらくは広島が児童文化の発進地であったことを明らかにし、そのいわば〈へ宝の山〉の研究は始まったばかりであるということ三浦氏は熱く語られた。

そのあとで、私は広島県の文学館を求める運動の歴史について語り、文学館がいまだに実現していない理由について考察した。私はその

時に広島に文学館ができなかった理由として三つ取り上げた。

ひとつは広島市の責任者の無理解であるが、このことについてはすでに述べたのでここでは省略する。もうひとつは市民の無理解である。このことは『ぎんのすず』を取り上げてみても分かることである。広島市民は〈へ宝の山〉を持ちながら、その意味を十分理解していなかったため正当に評価してこなかった。また原爆文学の意義をも認めず、それを世界に知らせることを怠ってきた。もうひとつの理由は、日本人々（とくに文壇の人々）が広島県の文学を評価しようとしなかったことである。たとえば大田洋子の原爆文学は発表当初から批判され、それにもかかわらず書き続けようとした彼女はさまざまな中傷によって深く傷つき原爆文学を書くことをやめてしまった。彼女の評価はまだ定まっていない。

広島に文学館ができなかった理由はさらにあるであろう。たとえば、人類全体が広島県の文学、とくに原爆文学の重さと意義を理解しようとしなかったことも大きいと思われる。だが、やはり肝心の広島市民がその重要性を認識せず、世界に発信しようとしなかったことが世界の無理解をもたらした主たる原因であろう。

六 おわりに（広島県の文学館はどうあるべきか）

最後に広島県の文学の特別な意義についてさらに考察しつつ広島県の

文学館はどうあるべきかについて考察してみよう。

広島文学館はまず原爆文学の研究をするべきであろう。すでにかなりの一次資料が「広島文学資料保全の会」の人々の努力によって集められているが、やはり広島市の直接的努力によって体系的に収集すべきであろう。二一世紀はアメリカにおける同時多発テロによる悲劇的な幕開けとなり、前世紀に始まった核開発とその結果としての核戦争の危機は依然として続いていることを強く感じさせられた。人類最初の被爆地としてのヒロシマの使命は従来にまして重くなっている。広島文学館は他都市の文学館とは違う特殊な使命があると見えよう。

しかしながら、広島には他の都市と同じような生活もあるし、そこから生まれる文学もある。原爆を乗り越えて生きてきた人々の文学に学ぶことは多いであろう。また、原爆以前の文学にも優れたものがあるということは前述したとおりである。そうしたものを調査し、資料を収集し、研究し、公開するのも広島文学館の仕事である。また、市民のなかにも広島市ならば貴重な資料を提供をしてもいいという人が多いのである。公的な文学館ができれば人も集まるとともに資料も集まるのである。

そして集めた資料を研究し、公開をしなければならぬ。資料の読み取りや文学的位置付けを行い、一般の人々に分かり易く説明するのは文学館ならば当然のことであるが、原爆文学の場合はそこに

留まることは許されないのである。つまり、原爆の問題は人類的な問題であって、核の再使用がささやかれる現在、被爆者が命を削って書き残したものが、自らは被爆者でないとしてもこの原爆文学を読みその地獄絵巻から人類の問題を考えた内外の原爆文学を少なくとも英語に翻訳し（可能ならば核保有国の言葉すべてに翻訳して）、ホームページなどで公開していくべきであろう。

また、旧日銀広島支店が文学館になるならば、隣接する頼山陽史跡資料館や近隣の平和記念公園と平和記念資料館とリンクすることで、この一帯は広島歴史・文学・文化ゾーンとなり、広島歴史と思想を継承するのにもっともふさわしい空間となるであろう。そして、そこは歴史的な記録を集め、研究し、保存し、公開する場であると同時に、広島市民の交流する場であり、世界の若い世代とつなぎ、人類の未来に向けてメッセージを発信する場であるべきだと思う。「広島に文学館をー市民の会」ではそのような内容の要請文を広島市長並びに広島市の企画調整課に出した。広島市は旧日銀広島支店の有効活用のための検討委員会を作り、その検討委員会から昨年八月に複数案件併記の報告（そのなかには文学館構想も含まれていた）を受けたが、残念ながらもまだ何も決定していない。

二〇〇二年二月末日

（みずしま・ひろまさ 広島大学）